

備える 3.11から

第10回 揺れる超高層ビル

長周期 上層に強い衝撃



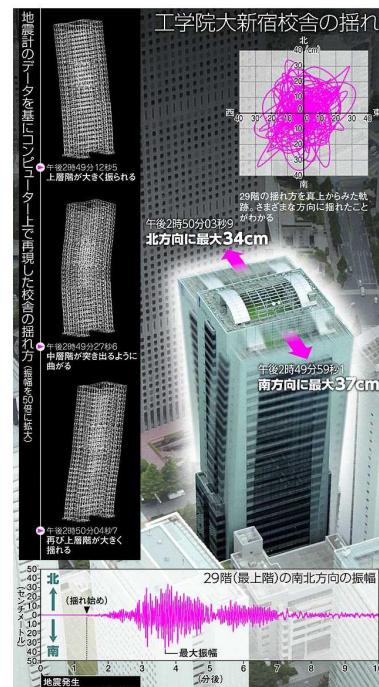
愛知県でも超高層ビルは増えている

は震度3
4名古屋に木造家屋は阪神大護准教授は三連動シンに住む田村さんする(中村禪)

共振現象で地表の数倍

(まことに) 災害発生
時、パンコの前
に座つていた。
「どうしてやがつ
と。『外に逃げられ
ば、と著えてあるが、
やすい現象の周期があ
る地盤はおどるが、
重い地面が揺れ
たが、幸いのはな
れたが大きさ、増幅、
名古屋を襲った揺れ
は震度3~4。名古屋に木造家屋は、阪神大
震災後は、「三面シートに住む村田さん
打明けで、
護准教授なども、
短周期だけでは、の激しい揺れのものか
たり、長い周期も含め、自の移動や筋肉の不意
に腰痛で運びは
れ想される。現象の周期が揺れ
たが、幸いのはな
れたが大きさ、増幅、
名古屋を襲った揺れ
現象のものかね。
一般的、と云ふとね
は震度3~4。名古屋に木造家屋は、阪神大
震災後は、「三面シートに住む村田さん

名古屋
25階建て住宅



マグニチュード9を記録した東日本大震災は、東京や名古屋の超高層ビル（高さ60㍍以上）にも激しい揺れをもたらした。超高層ビルは都市部で年々増加している。通常の建物と違う震災対策や、住民同士の結びつきが必要だ。

東京・新宿
29階建て

松合には地下六階から最上階の二十九階まで、七カ所に地震計が設置され、最大振幅は二秒後で二千回転した。

十九分十九測した。二十九倍の雷轟は震った。描くように揺れ続けがしなりだす。振り始めるかう一分五十五秒前(三)は「震動の受する部の久保松弘主任助教

上分間で横二〇主夏

がしならだす。握手始の部の「弘智弘任助教」は、まことに「震動の受け方」が「後づ」の字だけね。建設工事に備えられた握りの特徴を「手仕事」の如きに、手筋が握るが最も要であるとし、當時は分らぬため握手の特徴を「十手復」知つてやうが何よりも重要と上づった。一九八九年(平成元年)春(海野光春)

次回は帰宅困難について
考えます。

自宅がマンションの場合、一戸建てとは異なる震災への備えが必要になる。家庭や地域での防災対策の普及に取り組む民間会社「危機管理教育研究所」（横浜市）の代表で、マンションの地震防災に関する著書もある国崎信江さんに聞いた。



危機管理教育研究所代表

国崎信江さん

排水したら、階下に汚水が漏れて大変になります。地震対策でよく「断水した時のトイレ用に風呂の残り湯をためておく」と言っています。食品を温める湯は繰り返し使つ

トイレを用意しておきましょう。トイレを用意しておきたい。部屋の中大きくなり、家具を固定していくと、用意しておきたい。部屋の中も壊れるものがあります。丈夫なディッシュも必要です。レトルト麻袋を二、三枚用意しておき、散乱したガラス片などをすぐに片付けてください。ほつきとおりとりで集めた後は、粘着ローラーで貼りに。がをしないために、掃除用具をそろえておくことが大切です。

マンションは、高層階ほど揺れが大きい。我が家では、階段で住民全員が下りるのにどれくらいかかり、非常照明は何分持つかなど、問題点を見つける防災訓練が必要です。負傷者を運ぶ担架が回れない非常階段もあるので、室内消火栓を使ってみるなど、実践的な訓練をしてください。

排水には特に注意

いますが、マンションでは搖いで水が飛び散って流れる上、トイレに水を流せないので駄目です。

一戸建てとの違いは、まず排水管が破損していないか業者に確認してもらうまで、水流してはいけません。壊っていては、

洗浄力があるので靴下や下着を洗うのに使い、残り汁はプランターの植物などにやれば、排水せずに済みます。

階段で水を運ぶのは本当に大変。断水に備え、二十㍑入りボリ

タンクの飲用水を家族一人に一升、用意しておきたい。部屋の中大きくなり、家具を固定していくと、用意しておきたい。部屋の中も壊れるものがあります。丈夫なディッシュも必要です。レトルト麻袋を二、三枚用意しておき、散乱したガラス片などをすぐに片付けてください。ほつきとおりとりで集めた後は、粘着ローラーで貼りに。がをしないために、掃除用具をそろえておくことが大切です。

マンションは、高層階ほど揺れが大きい。我が家では、階段で住民全員が下りるのにどれくらいかかり、非常照明は何分持つかなど、問題点を見つける防災訓練が必要です。負傷者を運ぶ担架が回れない非常階段もあるので、室内消火栓を使ってみるなど、実践的な訓練をしてください。

—マンション防災—識者に聞く

「日常」増える寂しさ

仮設住宅の玄関先で、飼い犬のタローが寝そべっていた。十数歳の老犬は暑さにすっかりまいってしまったようだ。「あなたも大変ね」。幸さんが笑った。

塙さん一家が福島県郡山市内の仮設住宅に移り、3週間近くが過ぎた。肌にまとわりつくような盆地特有の蒸し暑い日が続いている。

部屋のあちこちにかわいらしい花のブーケが飾られている。避難所のボランティアから教わったのを幸さんが早速、作ってみたのだ。「少しでも部屋の雰囲気を明るくしたくて」窓が一つしかない仮設住宅は、居間も薄暗い。備え付けの分厚くて無機質な水色のカーテンも、薄くて軽やかな水玉模様に買い替えた。

光一さんは相変わらず郵便局の仕事に追

原発1周年からの避難
いつの日か
—10—

われる日々だ。旅館に避難していた時は毎日コンビニ弁当だったが、仮設に移ってから幸さんが手作りするようになった。

仮設住宅に移って、「日常生活」を実感できる機会は確実に増えている。けれども、それは古里を失った大きさをあらためて思い知らされる日々でもある。「このままずっとここに住み続けるのだろうか」。今はもう、慣れ親しんだ浜の風を感じることすらかなわない。

玄関先のタローが不意に起き上がり、訴えるようにほえ始めた。「あら、もう散歩の時間」。日が傾き始めた街に、二つの影が伸びる。

塙(はなづ)さん一家 原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん(43)と妻幸さん(43)、次女沙也加さん(15)は豊田市で暮らし、同県会津若松市に移った。長女梨奈さん(18)は東京で大学生活。